

じっきょう

地歴・公民科 資料 No. 87

もくじ	
巻頭	髪結と女髪結からみる江戸時代／横山百合子……1
トピックス1	空襲を通じて歴史の 「断絶」と「連続」を学ぶ / 柳原 伸洋……7
トピックス2	教室から見える「沖縄問題」 —私たちが問いかけていること— / 戸邊 秀明……12
図書紹介	……16

巻頭

髪結と女髪結からみる江戸時代

国立歴史民俗博物館 教授

横山 百合子

江戸で女の髪結が目立つようになったのは、18世紀末、寛政年間のことといわれる。その当時活躍した絵師喜多川歌麿の錦絵にみるように、江戸時代後期の女性の髪型は多彩で華やかである。それらの結髪の方法はこれまでも注目されてきたが、髪を結い、生活文化を支えてきた女髪結の姿は意外に知られていない。ここでは、江戸の女髪結の姿を男性の髪結と比較しながら紹介し、江戸時代の社会の特徴を考えてみたい。

女髪結の登場

1795（寛政7）年、江戸の町奉行所は、女髪結や、女髪結に髪を結わせる女性を、風俗を乱すものとして厳しく非難する触を出した。どんな身分であっても、「女は、万事自身に相応の身嗜みを

致すべき」であり、他人に結わせるとは、「風俗を猥^{みだ}し如何^{いかが}に候。右結わせ候女の父母、何と相心得罷りあり候哉」（『江戸町触集成』一〇二六七）という触である。女が他人に髪を結わせるなどんでもない、親の顔が見たいと言わんばかりの法令であった。ただし、このとき町触は、処罰ではなく、縫い物や洗濯など「女の手業^{てわざ}」といわれる仕事に変わるよう説諭を命じるにとどまった。

その後、文化・文政期になると取締りはいくらか緩むが、天保改革には、再び厳しい女髪結禁止令が出された。女髪結は百日過怠^{かたいろ}牢、その親は過料三貫文と三〇日手鎖、家主（女髪結に家を貸す大家）は過料三貫文、結ってもらった女は三〇日手鎖、その親も過料三貫文というものである



図1 洛中洛外図屏風（舟木本）（東京国立博物館蔵）

（『徳川禁令考』前集第五）。女髪結の入牢も相次いだ。女髪結の数は幕末には再び復活したとみられるが、江戸時代の間、女髪結の営業が公的に認められることはなかった。

髪結と女髪結の営業形態

では、江戸の髪結や女髪結とは、実際にはどのような仕事だったのだろうか。男の髪結には、「廻り」^{でとこ}、「出床」^{うちどこ}、「内床」の三つの営業形態があった。廻りは、決まった町内の各家を訪ねて結うもので、回る町を丁場ともいう。丁場は、営業のなわばりである。一方、出床は、橋のたもとや町内の木戸端などに設置した簡易な床番屋で結うものである。江戸時代の初め、慶長末年頃の京都を描いた「洛中洛外図屏風（舟木本）」（図1）には、五条大橋の橋のたもとの出床が描かれている。軒下の看板には、櫛、鋏、元結^{もとゆい}が描かれ、毛受けの布を持って髪結に月代を剃ってもらう客も描かれている。このような出床や廻りに加え、その後、家屋敷を借りて床屋を営む内床も誕生した。式亭三馬作「浮世床」には、町内の人びとが噂話



部分拡大

や芝居の評判などに興じる内床の情景が描かれている。

一方、女髪結は、どんな営業をしていたのだろうか。女髪結の営業は得意先を訪ねる廻りが基本である（出髪ともいう）。取締りの緩い時期には家で商売する内床も登場したようであるが、出床はもちろんない。

式亭三馬の小説で、女髪結を描いた「女浮世床」には、事実上の黙許だった時期の内床が描かれている。主人公のおつなは、弟子も二、三人かかえ絶大な人気を誇る女髪結で、自宅で客を待つだけで商売が成り立った。しかし、売れっ子の店といっても、「こつそりとせし新道」、すなわち目



図2 「女浮世床」より（資料提供 国立国会図書館）



図3 「浮世床」より（資料提供 国立国会図書館）

立たない路地に、一間の出格子と三尺の開戸を設け、のぞき込めば鏡台が置いてあるといった風情の店であった（図2）。『浮世床』に描かれる髪結の店（図3）とは大きく異なっていたのである。小説では、おつなが、客にお茶を出したり火鉢を勧めたりしながら、客の興味にあわせて人気役者

や習い事などの話を巧みに盛り上げ、今日の美容室のような状況が描かれる。しかし、このような女髪結であっても公的に営業を認められることはない。取締りが始まれば、たちまち店を閉めたことであろう。

女髪結の廻り営業の様子を示す資料は少ないが、



図4 女髪結（長崎大学附属図書館所蔵）



図5 髪結（長崎大学附属図書館所蔵）

女髪結を写した幕末の写真（図4）はその営業の様子を伝えてくれる。女髪結をモデルにして写したものとみえ、手前に櫛、手拭や髪飾りの布、簪などが置かれている。簪などは結ってもらう女性の持ち物だろうから、「櫛持歩く」といわれる通り、女髪結自身はわずかの道具をもって得意先を訪ねたのだろう。厳しい取締りの行われた天保改革期には、「女髪結入るべからず」と張り紙をする町もあり、こっそり廻り営業を行うことも難しかっただろう。同じ仕事でありながら、男女の違

いは、社会的に大きな差をもたらしたのである（図5は同時代の床屋）。

髪結と身分

それにしても、江戸時代には、髪結という職業がなぜ男女でこれほど違う扱いを受けたのだろうか。これは、江戸時代の身分とも深く関わる問題である。

江戸時代の身分についての研究が進み、近年は、同じ職分に携わる人びとの集団が、何らかの公的役割を担うことによって社会的に認められ、身分が成立するという見解が定着してきた。たとえば、百姓身分は、村の百姓集団が水利や入会地を管理し農業を行い、年貢などの役を村として集団的に負うことで成立する。かわた（皮多）の集団は、死んだ牛馬皮を取得する皮取り場（職場）を独占し、皮革上納や行刑役などを負い、かわた（えた）身分として位置づけられる。身分はこのように当時の人びとの職業と生活を支える根幹の集団を基礎に生まれ、何らかの役を負うことで固有の特権が認められ、身分として成立していくと考えられるようになってきた。

では、髪結という職業の集団も身分なのだろうか。たしかに、江戸の髪結は髪結仲間を作り、幕末にはその数も49組に及んでいた。それらの髪結仲間は、火事など非常事の駆付（役所の重要書類などの運び出し）や、年に二度、小伝馬町牢屋に収容された囚人の月代を剃る（やくぞ）役も負っていた。もちろん、町奉行所から見れば、これらは、身分に応じた役というわけではなく、雑多な町人足役の一つにすぎない。しかし髪結たちは、役を負うことで、市中の営業を独占し、仲間以外の髪結の勝手な営業（忍髪結）を取締り、営業を独占していた。髪結は身分とはいえないが、身分の論理に依拠して営業を維持していたといえよう。

権利の株化

しかも、髪結の営業の権利は、次第に株として売買されるようになっていった。株化の始まりは、

髪結親方が老年になって出床や丁場を弟子に預け、弟子が収益の一部を揚銭として指し出したことからはじまったといわれる。揚銭を得る権利は、次第に当事者から離れて株として売買され、髪結職には関わりのない人の手に渡るようになっていく。1816（文化3）年、日本橋北の品川裏河岸町（現在の三越本店付近）の出床と丁場の髪結株は、髪結とはまったく関係のない人物の間で、485両という高額で売買されている（国立国会図書館蔵「諸問屋再興調」十五）。

髪結職そのものは、「一銭職と下がった稼業」といわれた、都市下層の人びとの職業である。しかしそれは、みてきたように、江戸の社会に深く組み込まれ、公的にも実態としても安定した職分の世界を形成していたのである。

では女髪結の場合、株化にまでは至らないとしても、男の髪結のような営業のなわばりがあり、営業を保証し合う仲間があったのだろうか。

女髪結の投書

実は、江戸の女髪結については、これまで紹介してきた小説や随筆、法令以外には、あまり資料が残されていない。そこで、やや時代がくだるが、女髪結の実態を明治初期の史料や新聞記事などからみてみよう。

次の文章は、当時小新聞とよばれた読売新聞の明治9年5月11日付の、「八丁堀北島町鈴木の隠居婆々」の投書である。

女の開化というと少しばかり横文字を読んで、袴でもはき、太い帯へ手ぬぐいでもはさんで蝙蝠傘を杖につくぐらいを開化とし、また眉毛を立て歯でも白くすると、それで女の開化はたくさんだぐらいに思っている女中衆が多い。この女の開化へ目をつけるには、まず男女同権になるにはどうしたら宜しいかと思っごらん下さい。第一に男に負けず芸を覚え、亭主が百円とれば、女房も百円とる工夫をして、亭主が証文を書けば、女房も証文が書ける、そこで自然と男女の権が同じようになると、それが同権でありましょう。いまでは亭主に小言を言われる

と、亭主に向かってまた小言でもいうのを同権と心得て、銭といたら湯銭だけでも稼げないで同権めかす愚な女房もあれど、当節の心持ちで居ると、益々男に権をとられ、女はいつ真の文明開化になりますか。思えば思えば残念でたまりませんから、女中衆も一ト奮発して男衆に負けぬ御工夫をなさりまし。

すると、10日後の5月20日、「築地新栄町辻の婆々」と名乗る人物の次のような応答の投書が載った。

御尤の話だと思ひましたから、隣長屋のかみさんに其嚙をしましたら、オヤそんな事ハ屁でもないよ。私ハ女髪結をしていますから、唯でさえ宿六よりハ余計かせぎますハ。

小新聞は、現代でいえばタブロイド判夕刊紙に近い新聞である。“たねとり”と呼ばれるネタ集めの探訪者（今日の新聞記者）が町々から拾ってきた記事が多く、おもしろおかしく読める。右の記事も、本当に投書されたものなのかどうかはわからない。しかし、女髪結の経済的な自信が、読者にとっても違和感のないものだったのは確かだろう。その後も、明治期の新聞には女髪結がしばしば登場するが、多くは女髪結としての働きで夫を助けたり、一家の大黒柱として家族を支えたりする女性たちである。女髪結は、幕末の町奉行所の探索では1400人余いたというが、明治になっても、腕があれば経済的にも自立できる数少ない女性の職業だったとみてよい。

女髪結の営業を支えるもの

このような自立できる力をもった女髪結は、男の髪結の場合と同じように仲間を作ったり、なわばりを主張したりしたのだろうか。結論を先に述べれば、女髪結は髪結と違って、仲間組織もつくり、なわばりを主張することもなかったとみてよい。理由の一つは、女髪結と顧客の関係は、種々の記事にあるように、その人が持つ人間関係に支えられた「得意」であって、集団の力で営業の場を相互に保証しあうものではなかったことにある。

髪結の場合は、自分の丁場で忍髪結がこっそり商売をしたとなれば、力尽くで排除することも許される。仲間集団の内部で相互に丁場の所有を認めあい、種々の役によって市中の丁場の独占が公的に保障されているからである。一方、そもそも職業自体を否定され公的な位置を占めることができない女髪結は、当然ながら身分の論理からも排除されており、表だってなわばり独占の権利を主張することはできない。いわば、非公然の職業であり、事実上は「自由競争」の状態にあった。営業自体が非合法とされるなかで仲間を作ることは不可能であり、実際には競争が繰り広げられていたと考えられるのである。

女髪結たちの廃業願い

明治維新以後、女性の断髪は咎められたが、女髪結の禁令が出されることはなかった。女髪結たちは、江戸時代と同じく、正式に認められたわけではないが、実態として営業を続けていた。そのような時期の1880（明治13）年、東京府の中心に近い神田区一帯で、奇妙な届け出が続出した。「女髪結廃業届」である（東京都公文書館所蔵明治一三年「回議録」）。

神田区は、今日のJR総武線秋葉原駅から三駅離れた飯田橋駅の南側の一帯である。廃業理由は、「私は女髪結としてこれまで自宅営業と外廻りをおこなってきましたが、今年11月から病にかかり家業ができなくなりましたので、自宅営業は廃業しました」（吉田しげ）、「私は、昨年（明治12年）10月下旬より病気にかかり、自宅にては稼ぐことができないので、自宅営業は廃止しました」（坂間いく）などというものだった。病気にかかれば、早朝や夕べに得意先をまわる外回り稼業のほうを止めるのがふつうであろうが、これらの出願はいずれもその逆で、自宅営業のみを廃業するというのである。

このような女髪結たちの動きの背景には、明治12年に東京府が課した新たな地方税法「営業税賦課規則及雑種税賦課規則」があったとみられる。自宅営業者には営業認可の鑑札が交付されるかわ

りに、「自宅に於いて営業候ものは、一般理髪店と認め、徴税」することになったのである。おそらく、彼女たちは、自宅営業と外廻りの出髪を臨機応変に使い分けることができるという女髪結の営業の特徴を生かして、自宅営業をやめ外廻りに専念すると届け出て、これを逃れようとしたのではないか。このとき出された「廃業届」には、字体や文体がよく似ているものもあり、仲間、組合のような“お上”の認可には関わらないところで、女髪結たちの情報ネットワークが機能していたこともうかがえる。新聞紙上でのやりとりや、「廃業届」からは、時代の変化に臨機に対処しつつ、みずからの仕事に自信をもって働く女髪結たちの姿が浮かび上がる。

江戸の髪結と女髪結は、その組織も営業の実態も大きく違っていた。そもそも女髪結が禁止されたのは、寛政改革期の奢侈禁止の政策動向と、女は髪くらい自分で結うべきという、当時の為政者にとってのあるべき女性像が組み合わさった結果である。女はいかにあるべきかというジェンダー意識が政策創出の出発点となったといってもよい。そして、そのような形で始まった髪を結うという職分からの女性の排除は、江戸時代の身分制のなかで男の髪結が作り上げていった業態とは大きく異なる仕事のあり方と、“お上”には頼らない／離れるという職業意識を生み出していった。

髪結だけでなく、江戸時代の女性たちは、男性に劣らず働きに働いていたはずである。そのような女性たちの労働が、ジェンダーによる規範と身分制の論理のなかでどのように展開していたのか。さらにさまざまな労働世界の実態を探りあてていきたいものである。

*参考文献

- 吉田伸之編『朝日百科日本の歴史別冊 歴史を読みなおす19「髪結新三」の歴史世界』朝日新聞社、1994年
拙稿「一九世紀江戸・東京の髪結と女髪結」（高澤紀恵他編『別冊都市史研究 パリと江戸—伝統都市の比較史へ』山川出版社、2009年）
拙著『江戸東京の明治維新』岩波新書、2018年。